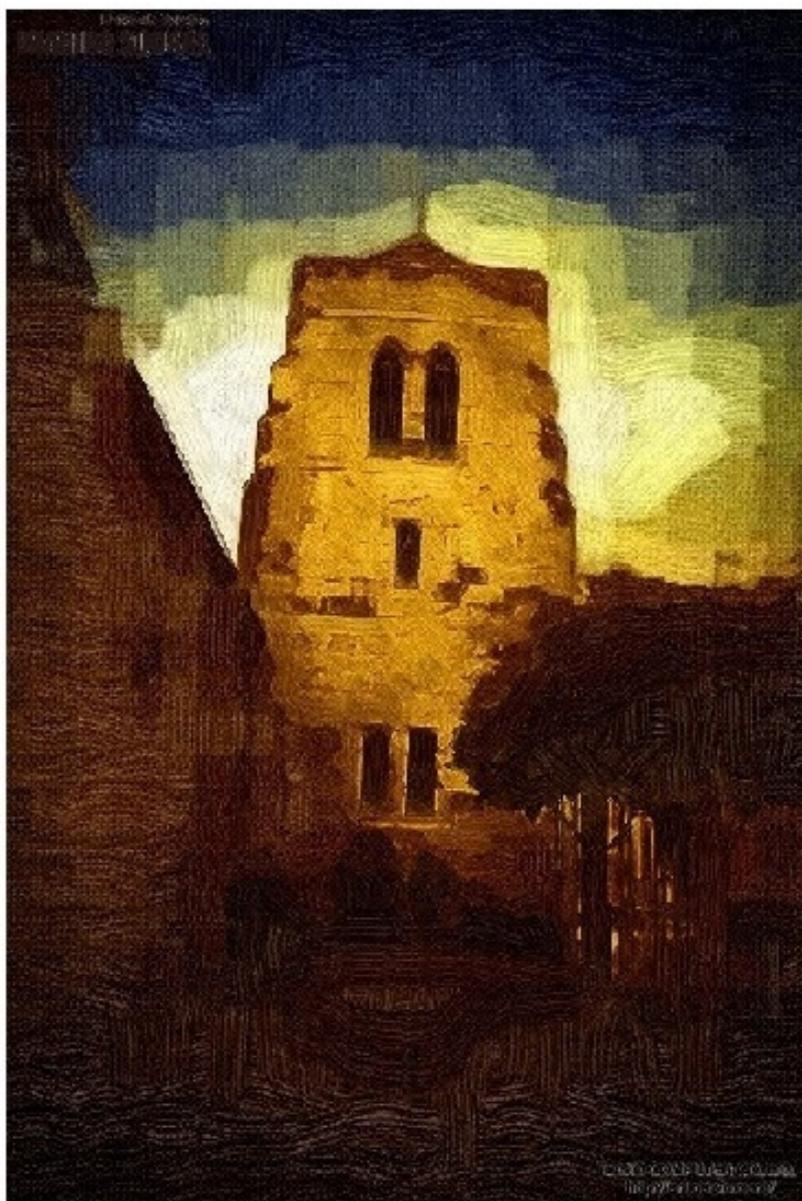


錫と鉛の重さと

古典的童話の二次創作抄



@onaishigeo

金の斧

沼から女神が現れた。

「金の斧と鉄の斧、沼に落としたのはどちら？」

屈強そうな男が答える。

「斧など落としてない。無くしたのはお前。だからお前を、この俺に返してくれ」

女神は鉄の斧を沼に投げ捨てた。

「私はもうこの世の者ではありません。ご存じでしょ？」

どうかこの斧を、私と思って持ち帰って下さいませんか？」

そう言って金の斧を差し出す。

男は一步、沼に足を踏み入れた。

「そうしてお前は、またこの俺に、力づくで何度も叩きつけられたいと言うのか？」

「はい、何度でも。

幾度、生まれ変わっても。

それが私の定め。そしてそれが、あなたの業」

男はもう一步、足を踏み入れた。

蛙の王子

寝苦しい夜。

猫がどこかで鳴いている。

王女は寝室を抜け出し、池のある裏庭に行った。

すると猫が前足で、大きな蛙を取り押さえ、餌をねだるように鳴いていた。

「どうか私をお助け下さい。

私は魔法で蛙に変えられた隣国の王子。

私を人間に戻してくれたなら、あなたの願いは何でも叶えましょう」

驚いたことにこの蛙は人語を解する。

「おもしろい。

しかし私の願いが、腹を空かせたこの猫に、

よく肥えた蛙を食べさせたい...というものであったらどうするのだ？」

蛙の王子は少し思案してから答えた。

「分かりました。

お望み通り、あなたを蛙に変えてから、その猫に差し上げましょう」

ふと気づくと、王女は背中を巨大な猫に踏みしめられ、

視界の片隅に、立派な身なりの若い男をぼんやりと見た。

赤ずきん

赤ずきんは怒っていた。

「どうして私の祖母を食った。
卑しい奴。
お前の腹を切り裂いて、
永遠に満たされず、渴き続ける体にしてやろうか」

狼はもがきながらも必死に声を上げる。

「悪いのはあなたです。あつしを虜にしたあなた。
あつしを責める前に、一昨日あなたが森であつしに何をしたか、
それをまずは思い出してほしい」

赤ずきんは宙をにらんで記憶をたぐり寄せた。

「お前の獲物を頂戴したあのことか？
それのいったいどこが悪い。
わたしはあのとき飢えていた。
飢えた女が己を武器にするのは当然だし、
お前は喉を鳴らして兎を私に差し出したではないか」

狼は声を潤らして反論する。

「ならばあつしが血迷って、
あなたのオババを食らってしまうのも、
これまた真つ当な色恋の定め。
文句を言われる筋合いはない」

「まったく...色恋の機微も解さない下等動物よ。
お前が百度も通い詰めれば、
いずれわたしも情にほだされたかも知れぬのに」

狼は涙ながらに訴えた。

「あつしにそんな駆け引きなど出来ません。

本気であなたと添い遂げたかっただけ」

赤ずきんは狼めがけて唾を吐いた。

「浅ましい獣めが！」

そして赤ずきんは、
荒縄でぐるぐる巻きにした狼めがけて、
ためらうことなく斧を振り下ろした。

眠りの森の美女

「姫は王子が口付けると目覚めるというが、
実はその『王子』の定義がひどく曖昧なのだそうだ」

「と言うことは...
たとえば『自分が王子』だと言い張る中年オヤジでも目覚めるとか？」

「たぶんそれでも目覚める。
そもそも魔女に眠らされたと言うのも姫の作文らしい」

「なんと！ いったい姫は何のために？」

「分からん。何しろ500年前の事ゆえ」

「おーい。誰でもいいから姫にブチュツとしてみろ」

護衛兵はみな後ずさった。

美女と野獣

野獣が言った。

「お前が望むなら、この世の物もあの世の物も何でも与えよう」

「ならば、貴方の命を。
その代わりに私は生涯、他の野獣とは契らないと約束する」

「・・・人間とは？」

「それは約束できない」

「それ、ずるくないですかあ？」

「あらそう？」

「かなり狡猾です！」

シンデレラ

「前から疑問だったのだけど、
シンデレラの靴はガラス製なのに、どうして割れなかったんだろうね」

「まさか！ 失われた加工技術があったとか？」

「そう。シンデレラは単なる童話ではなく、
闇の古代文明について記された黙示録という可能性があるのだ」

「するってーと...ビビデバビデブは暗号とか！」

「ふふ、これでダビンチ・コードを越えたな」

シンデレラ 2

「少しは家事手伝ってよね」

「いいのか？ 俺にやらせると主婦の立場がなくなるぜ」

「へー、すごい自信なんだけど、そんなこと初めて聞いた」

「はははっ！仕方ない今こそ明かそう。
隠していたが俺はシンデレラの生まれ変わり。家事は得意中の得意なのだ」

「なーんだ。実は私シンデレラの姉の生まれ変わり」

「ええ？」

「ほら。さっさと掃除しなさい！」

「ヒエエエエエエ！」

ラプンツェル

「ラプンツェルは長い髪を縄にして王子を連れ込んだというが、どうしても腑に落ちない点がある」

「どんなこと？」

「幽閉されていた塔の高さを仮に3メートルとしよう。
三つ編みにするためにはやはり3mは必要。
しかし彼女が20歳と仮定しても、人間の髪はそんなに伸びないのだ！」

「すげー！ それって秘術があったと？」

「もちろん強力育毛剤説も捨てがたいがな」

猫又伝説

「飼い猫が長生きすると猫又になると言うけどさー、
猫が猫又になって、いったい何するつもりなんだろう」

「やっぱり化けるとか？」

「化けてどうするの？」

「人間を、懲らしめる」

「誰を？」

「・・・飼い主？」

「長生きするほど飼い主に可愛がってもらったのに？」

「・・・この伝説、絶対変だー！」

「でしょー」

錫と鉛の重さと（古典的童話の二次創作抄）

<http://p.booklog.jp/book/36734>

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36734>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36734>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.